

球審のストライクのメカニク

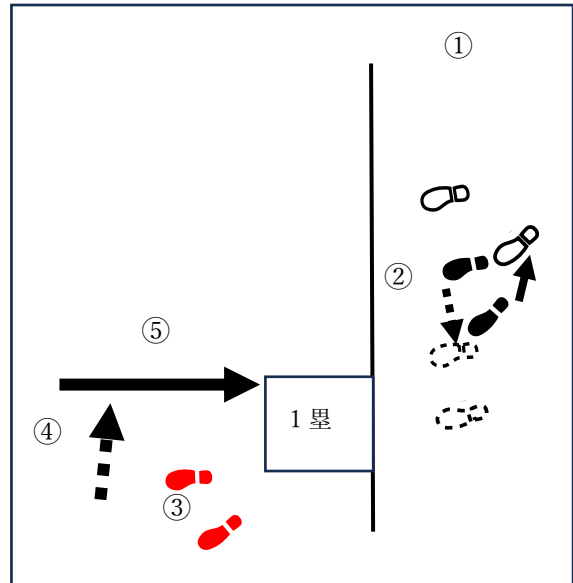
2024/6/28

今年から、全軟では球審のストライクのメカニクに横振りが解禁された。捕手の送球を球審が邪魔をして試合を中断し、走者を元の塁に戻すといったケースが少なくなり、球審にとっては便利なメカニクであるとともに、実は難しさを秘めたメカニクでもある。何故なら、体の向きを横にし、その方向へ指をさす動作をするからである。この動作は目切りが早くなりやすいため、本来のたたくメカニクを徹底して身につけることが肝要である。つまり「ストライク」とコールするときに、捕手のミットを見続けながらコールする習慣が身につかなければ目切が早くなり、低めの投球についていけなくなるからだ。USA でも NPB でもマイナーの審判員には、最初は横振りを禁じているのはそのような理由があるからであろう。ミットに収まった投球をしっかり見切つて、同じテンポで切れのあるメカニクとコールがきくようにするために彼らはひたすら練習をするのである。

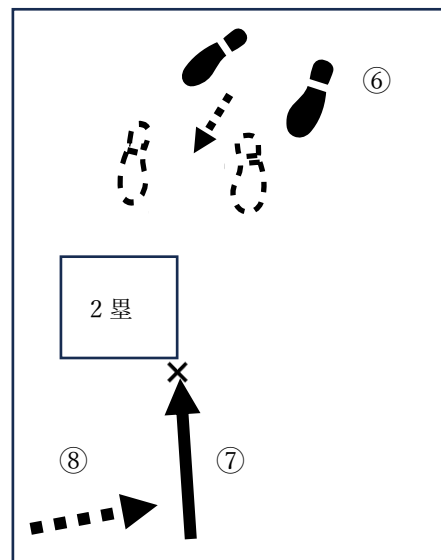
MLB の審判員でも、最近、ストライク・ボールの判定ミスがかなり問題になっている。ベテランほど判定ミスが多いともいわれ、かつては1試合に7球以内の微妙な判定ミスであれば、優秀な審判員だとも言われた時代があった。しかし、最近では1試合に20球も判定ミスを行っているなどと非難を浴びることさえあるようだ。特にアンヘル(エンジェル)・ヘルナンデス審判員のストライクゾーンに対する判定ミスの多さは、選手だけでなく観客やマスコミからもかなりたたかれており、彼の引退の引き金になったと思われる。

それでは、どうすれば判定ミスを少なくすることができるのだろうか。ストライクゾーンという不安定な空間を通ったかどうかをいかに正確に判定するためには、トラッキングを身につけたりする努力をしているが、そのほかに何か良い方法がないかを探すべきだろう。投球される前からしっかりした構えをすとか、アバウトな空間ではなく、捕手の膝頭や最初に構えたミットの位置、捕手の位置など、できるだけ具体的な事象を目印にする等、各自で努力をしていく必要はあるだろう。友人から横振りについて聞かれることがあるが、私は「NPB の市川球審を見ると勉強になる」と友人には言うようにしている。

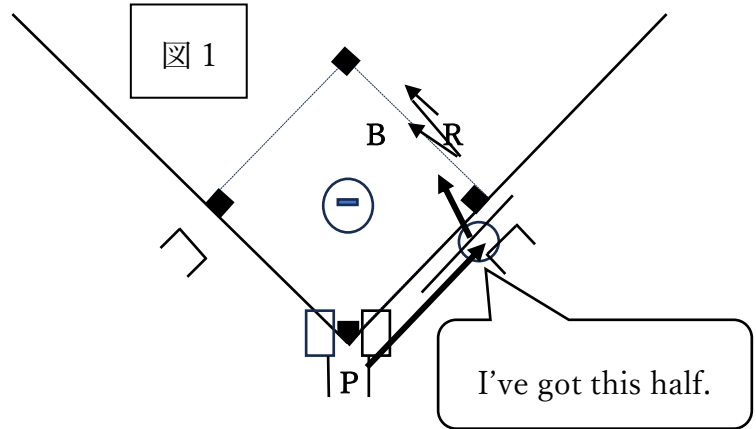
MLBの野球を見ていると、まず、1塁走者がいるときの1塁手の立ち位置が少し変わってきた。以前なら足をベースの近くにおいて牽制球をベース近くでタッグしていたが、最近はベースから少し離れた位置に足を置き、牽制球をベースより少し2塁寄りでタッグしようとするプレイが多くなっている。そのため、1塁塁審は1塁手のタッグと走者の隙間を見ようと②に位置しているのだと思われる。勿論、投球されたらファウル線寄りにステップしている。(図の①は従来の塁審の位置、②は最近の塁審の位置、③は1塁手の位置、④は1塁手のタッグの軌道、⑤は1塁走者の帰塁の方向)しかし、②の位置は、送球や打球に当たりやすく、1塁線の打球判定が難しいといったデメリットもあり、我々が真似をしようとするとかかなり難しいので、避けた方が無難である。



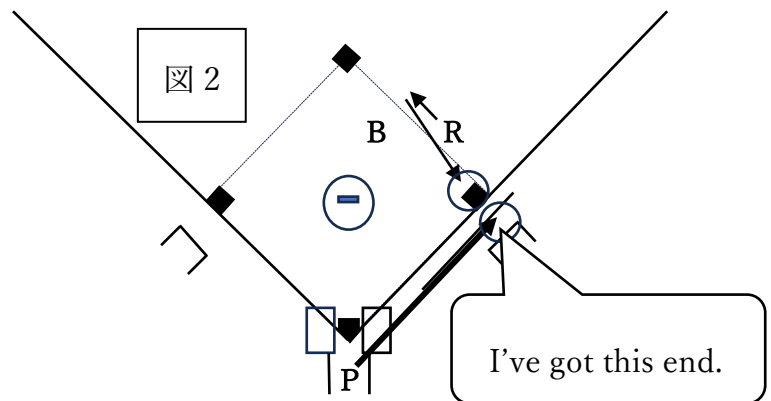
また、2塁に盗塁したとき、以前は捕手からの送球を2塁ベースの1塁側のふちの×で捕球し、走者のスパイクにタッグしていたが、最近は2塁から1塁方向に少し離れたところに送球させ、走者の体にタッグするケースがよく見られるようになってきている。そのために、MLBの2塁審判は、タッグの隙間がより見えやすいところに位置しようとしてショート前ではなくセカンド前に位置するクルーがかなり多い。また、2塁ベースの外に位置しているクルーもよく見かける。(⑥は2塁の外に位置した2塁審判の位置、⑦は1塁走者の盗塁の軌道、⑧はタッグの軌道)⑥に位置した場合、外野飛球は追わないらしい。



走者1塁、牽制球で挟殺プレイになった場合、今までは、**図1**の様球審が1塁のファウル地域まで走って移動し、走者が2塁方向に追われて移動するとき「I've got this half.」(半分は任せろ)と発声しながらフェア地域に入って、塁審と半々で1・2塁間の判定を分担していた。



最近では、**図2**の様球審は1塁のファウル地域まで走って移動するが、フェア地域に入らないで、走者が1塁ベース付近(○地点)に来たときだけ「I've got this end.」(ベース付近は任せろ)と発声しながら、1塁の外から判定をするようにしているようだ。しかし、この新しいやり方は、今年度は避けて、来年度の講習会で練習した後に行うようにしたい。



3対2と1点リードされた後攻チームの攻撃、2アウト走者2・3塁のとき、球審がボールカウントを2&2と投手に示した後、投手が投げ込んだ投球を、打者は見逃した。球審はストライク3とコールしながら力強くパンチアウトのアクションをした。守備側の内野手はそれを見て、3塁側ベンチに引き上げようと移動し始め、本塁に誰もいない状態を見た3塁走者が本塁を駆け抜けた。すると攻撃側の監督が球審のところへ出てきてボールカウントが間違っていることを告げた。まだ2ストライクだというのだ。攻撃側の監督は、打者は三振ではなく、今のストライクでボールカウントは2&2になったのであり三振ではないと必死に抗議し始めた。まだ、球審はタイムをかけていなかったため、塁審がタイムをコール、その後2塁走者も本塁を走り抜けた。攻撃側の監督は、球審に対しボールカウント2&1からのストライクだから三振ではないし、走者が二人とも本塁を踏んだので2点が入ったと抗議をし続けていた。塁審が両チームのスコアラーにボールカウントを確認すると、守備側も2&2だと認めたので、「ストライク3とコールしたことから、守備者達は引き上げようとしたので、我々審判員のミスですから、二走者を投球当時の塁に戻し打者は2&2から打ち直すことで、試合を再開させてほしい。」と告げると、両監督とも受け入れてくれたので、上記の状態ですべて試合を再開した。結果はリードされていた後攻チームがこの回に4点を入れて逆転し、攻撃が続く中で試合時間の90分が来てしまったので3-6で後攻側の勝利で試合を終了した。今回の事例のように両チームの監督が折れ合ってもらえるところをさがして試合を再開するようにしなければならないが、同じ失敗を繰り返さないためにはどうすればよいのだろうか。また、ボールカウント訂正は、いつまでならできるだろうか？

8.02cには、「……投球カウントの誤りの訂正は、投手が次の打者へ1球を投じるまで、または、イニングや試合の最終打者の場合には守備側チームのすべての内野手がフェア地域を離れるまでに行わなければならない。」（上記の は筆者が付けたもの）と記されている。

では、「打順の誤り」があった場合はどうであろうか？このアピールは上記の の規定がなく、アピールは「投手が次の打者へ1球を投じるまで」に行えばアウトが成立する。

つまり、例を挙げると、2アウト走者2塁の場面で、正位打者AのところをBが打席に入り外野へヒットを打ち、Bは1塁をまわって2塁に向かった。2塁走者は3塁をまわって本塁に向かっている。

打者走者の B は 2 塁で タッグアウトになった。この場合、タイムプレイとなるので球審は 2 塁と本塁の延長線上でタイムプレイを判定しなければならない。そして、得点が入ったかどうかをコールしなければならない。もし、B がアウトになる前に 2 塁走者が本塁を踏んでいたならば、球審は得点が入ったことを宣告することになる。B は不正位打者なので、攻守交代をして、守備についた相手側の投手が 1 球を投じる前ならば、不正位打者のアピール権が残されている。6.03b(3)(A)(B)及び【注 1】(5)(7)【例題 5】の【解答】

攻守交代後でも、投手が投球する前ならば、不正位打者のアピールがあれば、球審は先ほどの攻撃側の B を不正位打者としてアウトを宣告し、B の打球に起因した得点を無効にすることを宣告しなければならない。

ボーク宣告後に打者のインターフェアランス(妨害)

2024/7/7

3人制の試合で、走者1塁、その走者が2塁に盗塁、投球を捕球した捕手が2塁に送球しようとしたとき、打者が本塁上を横切って送球を妨害した。球審はボールをコールした後、インターフェアを宣告してプレイを流した。2塁はセーフとなったので、球審はタイムをかけて、再度、打者のインターフェアを宣告し、打者はアウト、走者には1塁へ戻るように指示をした。

すると、ショート前に位置していた3塁塁審がタイムをかけ、他の二人の審判を呼び寄せて「ボークを取りました」と告げた。二人の審判員はボークの音が聞こえなかった為にボーク宣告に気付いていなかったのである。そこで、インターフェアランスより早くボークが宣告されているために、走者を2塁に進め、打者には投球前のボールカウントから再開する旨を両ベンチに伝えて、試合を再開した。珍しいケースに遭遇したが、普段からこのようなケースがあった場合、どう処置すればよいかを想定してトレーニングしておくといよい。

「ボークと打者のインターフェアランス」「ボークと捕手の打撃妨害」のケースなどを想定して頭の中でトレーニングしておくことも大切である。

走者なしで思わぬ出来事が

2024/7/28

3人制の試合、1アウト走者2・3塁で打者がセンターの外野手を大きく越える大飛球を打った。外野手は必死に打球を追いかけたが、その間に二人の走者は勿論ホームインし、打者走者もランニングホームランとなった。球審は走者がいなくなったので、タイムをかけずにボールを捕手に渡しボール交換をした。2塁付近で野手が何やら呼びかけていた。ボールを受け取った野手が2塁ベースを踏んでアピールをし、2塁付近にいた1塁塁審がアピールセーフをコールしたのである。タイムをコールしなかった為に塁審はタイム中であることを知らずにアピールを受け付けてしまった。打者走者の2塁空過のアピールがあらうとは思っていなかった球審は、自分の不注意によって思わぬミスを引き起こしてしまったのである。塁の空過のアピールが残されている場合は要注意だ。また、今回の場合や走者が残っている場合にタイムをかける場合は、タイムをコールしたら、クルーの審判員がタイムをエコーするまでは、タイムのメカニックを残しておくことが肝心である。

2024/7/28

友人から以下のようなケースが起きたのだが、どのように対処すべきなのか質問された。

走者なし、打者が内野ゴロを打ち、内野手が1塁へ悪送球、それた送球を1塁ベースコーチが思わず捕ってしまった。球審は直ちにタイムをコールして、塁審と協議した結果、この妨害がなかったとしても2塁への進塁は難しいと判断し、打者走者を1塁にとどめ試合を再開したが、この処置でよかったのかという質問である。

6.01e【原注】では、「…ボールを拾い上げたり、捕ったり、意図的に触れたりすることや、押し戻したり、蹴ったりすれば、この行為は故意の妨害とみなされる。…」6.01f「…ベースコーチが故意に送球を妨害した場合には、走者はアウトになる。」とあり、今回の事例のベースコーチの「思わず捕ってしまった」行為は故意の妨害とみなされるが、しかし、守備側に不利益が生じてもないし攻撃側に利益が生じたわけでもないので、「アマチュア野球内規」の⑧の3アウトと勘違いした守備側が、使用球をベースコーチに手渡し、受け取った場合と同様な処置でよいと考えるが、皆さんの考えはどうであろうか。

上記の二つの事例を考えて

2024/7/28

守備側が3アウトと勘違いして攻撃側のベースコーチにボールを手渡した。内野手がファウルラインを越えてベンチに帰ろうとしていたが、内野手が一人だけ内野内に残っている状態で、アピールしようと思いついてベースコーチからボールをもらいアピールをしようとした場合、アピールはできるのか？

「野球審判員マニュアル 第4版」の「アピールプレイ」では、
「**コーチなどの攻撃側**がボールを受け取った場合、ボールデッドとし、守備側の**アピール権は消滅**することとする。

…途中略…**審判員**が誤ってボールを受け取った場合、ボールデッドとするが、この状態ではまだ**アピール権は消滅しない**こととする。」

と記載されており、上記の場合、**守備側のアピールは認められない**ことになる。整理するとボールを受け取る側が、**攻撃側と審判員の場合とで処置が異なる**ている。

試合中に監督が球審のところまで来て投手の交代を告げた。新たな投手がマウンドに上がると監督はマウンドへ行き指示を与えてからベンチに帰って行った。その後、投手は投球練習を開始した。球審は、監督が投手のもとへ行った回数にカウントしなかったため、後に審判員の間で意見が分かれた。

5.10ℓ【注3】には、以下の記述がある。

「監督（またはコーチ）が投手のもとへ行った回数を数えるにあたって、イニングの途中で投手交代の通告が行われた後、プレイが再開されるまでに新しく出てきた投手のもとへ監督（またはコーチ）が行った場合、監督（またはコーチ）がマウンドに行って投手を退け、そのままとどまって新しく出てきた投手に指示を与えて引き上げた場合、いずれも1度とは数えないが……」

競技者必携の規則適用上の解釈（29）

- 1 監督またはコーチがファウルラインを越えて投手のもと（マウンド）へ行った場合は必ず1回に数える。（ただし投手交代の場合は除く）
- 2 イニングの途中で監督またはコーチが投手のもとへ行き投手交代する場合新しい投手がマウンドに到着し、その投手がウォームアップ（準備投球）を始めたならば、その監督またはコーチはベンチに戻らなければならない。もし、そのままとどまっていた場合には1回と数える。（下線は筆者が引いたもの）

よって、監督は投手が投球練習を開始する前にベンチに帰って行ったので、カウントしてはいけないことになる。